白楽天の草堂生活

丹羽博之

要旨

元和十年秋、白楽天は江州司馬に左遷され、潯陽に下る。その地で、廬山の香炉峰の近くに草堂を構え、半隠の生活を送る。この草堂は綿密な計画の下に造営され、十分に満足のいくものであった。それは「草堂記」やその他の詩文から窺われる。

第一章では、彼の草堂生活が五感を十分に満足させるものであったことを、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚に分類し、分析していく。特に人工的に池や泉を作り、魚を放ち白蓮を植え、さらには崖から筧を架けてその水滴を楽しむといった、手の込んだ趣向を凝らして楽しんだことを述べる。茶畑も作り、その茶や酒を味わい、琴の音楽や自然の音も楽しんでいる。

第二章では、白楽天が草堂建設に当って、事前にどのように準備したかを詩文から探る。次に草堂建設にあたって経済的な裏付けも十分に有ったであろうことを考察する。

第三章では、江州を去った後、白楽天が草堂を追憶した詩を考察する。

キーワード：白楽天　草堂記　白氏文集

元和十（八一五）年秋、白楽天は宰相武元衡暗殺事件の上疏がたたって、江州司馬に左遷される。国を思っての行動が認められず、憤懣やるかたない思いで任地へ向った。不満はあるものの、近くの廬山は景勝の地であり、そこに草堂を作り、近くの東西林寺の僧侶達と親交を深めた。

草堂での生活は十二分に満足できるものであり、自適の生活を送る。草堂生活について述べた詩文を読むとそのことがよく分る。本稿では白楽天の草堂生活を中心に考察を加える。

一、五感の満足

白楽天は草堂での満足した様子を繰返し述べているが、五つの感覚に分けてみる。

①視覚

草堂の風景といえば、香炉峰の雪が先ず思い浮かぶが、草堂の周りの風景を「草堂記」（以下「草」と略す。）では微に入り細に入り描写する。その代表的なものを挙げる。

「仰観山、俯聴泉、傍睨竹樹雲石。（仰ぎて山を観、俯して泉を聴き、傍らに竹樹雲石を睨む。）」

「其四傍、耳・目・杖屨可及者、春有錦繡谷、夏有石門澗。（其の四傍、耳・目・杖屨ば及ぶべき者、春には錦繡谷有り、夏には石門澗有り。）」

「堂東有瀑布、水懸三尺、瀉階隅、落石渠、昏暁如練色、夜中如環珮琴筑声。（堂の東に瀑布有り、水懸ること三尺、階の隅に瀉ぎ、石渠に落ち、昏暁には練の色の如く、夜中には環珮琴筑の声の如し。）」

等とある。

この他、「草堂前新開一池、養魚種荷、日有幽趣。（草堂の前に新たに一池を開き、魚を養ひ荷を種ゑ、日に幽趣有り。）」（〇三〇四）の詩

には「紅鯉二三寸、白蓮八九枚」とあり、草堂の前の池を見て楽しんでいるが、詩題が示すようにこの池は人工のものでかなり手の込んだものであった。「祭匡山文」（一四五一）にも「開構池宇（池宇を開構し）」とある。後に洛陽での「池上篇」の世界の萌芽が已に窺われる。

草堂から見下ろす東西林寺や九江の眺望も心慰めるものであったに違いない。

②聴覚

A：鳥獣

草堂で聴覚と言えば、「遺愛寺鐘欹枕聴」がすぐ思いつくが、

「香鑪峯下、新置草堂、即事詠懐、題於石上。（香鑪峰の下、新たに草堂を置き、事に即きて懐を詠じ、石上に題す。）」（〇三〇三）に「有時聚猿鳥、終日空風烟（時有りて　猿鳥を聚め、終日　風烟を空しうす）」とあり、鳥や猿の鳴き声も白楽天の心を慰めた。

B：泉声

「草堂記」には、視覚とともに泉の音を「仰観山、俯聴泉」「夜中如環珮筑声」と述べる。

しかも、「堂西倚北崖右趾、以剖竹架空、引崖上泉、脈分綫懸、自簷注砌、纍纍如貫珠、霏微如雨露、滴瀝飄漉、随風遠去。（堂の西は北崖の右趾に倚り、剖竹を以て空に架し、崖上の泉を引き、脈分綫懸、簷自り砌に注ぎ、纍纍として貫珠の如く、霏微として雨露の如く、滴瀝飄漉として、風に随つて遠く去る。）」とあるように、筧を作っての人工的なもので、手の込んだものである。堂前の池が人工的であったことと軌を一にする。なお、泉声が白詩に登場するのはこのころからである。

「題元十八渓亭」（〇三〇二）に「宿君石渓亭、潺湲声満耳（君が石渓の亭に宿すれば、潺湲として声耳に満てり）」とあり、それ以前の詩、例えば仙遊寺等にも泉はあったと思うが詠まれておらず、廬山草堂生活において泉声が初めて登場する。そのきっかけの一つが、この元十八渓亭であったかもしれない。廬山から流れてくる豊富な泉の音が白楽天の心を慰めた。泉の音は詩的感興をもたらし、新たな詩材として詠まれていく。なお、この泉は陶淵明、恵遠の虎渓三笑の上流に当るようである。泉の音には耳には聞こえない周波の音波もあり、それが癒しにもなると聞いたことがある。

C：葉風

樹々にそよぐ風の音も彼を慰めた。「題二遺愛寺前渓松一」（一〇七八）の詩に「暑天風槭槭、晴夜雨凄凄（暑天　風槭槭たり、晴夜　雨凄凄たり）」とあり、その近くにあった草堂でも松や竹を吹く風の音に耳を澄ませたことであろう。

D：琴

「漆琴一張」（「草」）を持ち込み、自ら「北窓三友」と呼んだ琴を静かな山中で心ゆくまで楽しんだ。鳥獣の鳴き声や木々の葉ずれ、自然そのものの奏でる音。人の手を加えた泉の音や琴の音色等様々に工夫して自適の世界を築いた。現代でいう音楽セラピーに通じよう。

③嗅覚：茶・草花

「又有飛泉植茗、就以烹煙（又た飛泉有り茗を植え、就きて以て烹煙す）」（「草」）とあり、好きな茶の香りも白楽天を慰めた。また、「雑木異草、蓋覆其上。緑陰濛濛、朱実離離、不識其名、四時一色。（雑木異草、其上を蓋覆す。緑陰濛濛、朱実離離、其の名を識らず、四時一色なり。」（「草」）

とあることから、雑木異草の香りも有ったのではないか。

④味覚：茶・山菜・酒

「又有飛泉植茗、就以烹煙（又た飛泉有り茗を植ゑ、就きて以て烹煙す。」（「草」）とあり、廬山の茶の味と香りを楽しんでいる。この他、「朝飡唯薬菜、夜伴只紗燈（朝に飡うは唯だ薬菜、夜に伴うは只だ紗燈」）（〇九八三）とあるから、山菜や筍に舌鼓を打ったのであろう。筍は白楽天の好きな食べ物であった。また、「左乎攜一壺、右手挈五絃（左に一壺を攜へ、右手に五絃を挈ぐ）」（〇三〇三）とあり、好きな酒も草堂で嗜んでいた。詩、琴、酒の三友は終生変わらぬ彼の伴侶であった。

⑤触覚

温度や湿気、涼風など皮膚感覚も満足させるものであったが、それらは、快適になるように白自身によって設計されたものであった。白は草堂の様子を以下のように描写する。

「来陰風防徂暑也（陰風を来たらしめて徂暑を防げばなり」（「草」）「盛夏風気如八九月時（盛夏の風気も八九月の時の如し）」（「草」）

「南簷納日冬天煖、北戸迎風夏月涼（南簷日を納め冬天煖かに、北戸風を迎へて夏月涼し）」（〇九七五）

「雲生澗戸衣裳潤、嵐隠山廚火燭幽（雲澗戸に生じて　衣裳潤ひ、嵐山廚を隠して火燭幽かなり）」（〇九七七）

この他、新たに引いた泉の飛び散るあたりには体に良いとされるマイナスイオンも飛び交っていたであろう。余談だが、滝に打たれる修行も案外こうした効果もあるのではないか。「堂前有喬松十数株、脩竹千余竿（堂前喬松十数株、脩竹千余竿有り）」（「与微之書」）とあり、今で言う森林浴の効果もあった。

以上、草堂は彼の五感を満足させるものであったが、十分快適に生活できるように池を開き、泉を引き、筧を架けるなど自ら工夫している点も見逃せない。こうした、環境や生活は現代医学の目から見ても癒しの空間と言えるであろう。このことは自覚していたようで、「平生所好者、尽在其中。不唯忘帰、可以終老。此三泰也。（平生好む所の者、尽く其の中に在り。唯に帰るを忘るるのみならず、以て老を終ふべし。此れ三泰なり。）」（「与微之書」）と述べる。

東林寺からは錦繡谷の上方を望むことができ、草堂はその東林寺の上方にあり、白楽天は暇に任せて、このあたりをよく散策したようである。名所の錦繡谷・石門澗はかなりの高所で、断崖絶壁の道を歩かねばならず、杖をついての歩行とは言え、相当の運動量である。また、香炉峰に登って雨に打たれた詩も残しており、これらにも、現代の医学で言う運動療法に近いものがあるのではないか。杖をついての適度の運動はピクニックかトレッキングの楽しみに通じよう。

二、草堂建設の事前十分計画と経済的裏付け

草堂建設は、白楽天らしい綿密な計画と経済的裏付けのもとに実行に移された。「従此万縁都擺落、欲攜妻子買山居（此れより　万縁都て擺落し、妻子を攜えて　山居を買はんと欲す）」（〇九四四）、「欲作雲泉計、須営伏臘資（雲泉の計を作さんと欲せば、須らく伏臘の資を営むべし）」（〇九四七）、「或擬廬山下、来春結草堂（或いは擬す廬山の下、来春草堂を結ばんと）」（〇九五二）と繰返し、草堂生活の計画を詩に詠む。彼の後半の人生がそうであったように、草堂を作るに当っても、計画的、かつ慎重である。

「春有錦繡谷花、夏有石門澗雲、秋有虎溪月、冬有鑪峯雪」と、「草堂記」には四季の描写があるが、住み始める前からその四季折々のすばらしさを予測もしている。

草堂建設の費用の捻出にあたっても十分な経済的裏付けがあったようだ。長い浪人生活を経て、やっと官僚になれた喜びと束の間の閑居の喜びを述べた詩の中に

俸銭万六千　月給亦有余　　俸銭　万六千　月給りて亦た余り有り

「常楽里閑居、偶題二十六韻」（以下略）」（〇一七五　貞元十九（八〇三）年　三二歳　長安）

とあり、秘書省校書郎の時の月俸は一万六千銭であった。ところが、江州司馬になると「歳廩数百石、月俸六七万」（「江州司馬庁記」一四七一）とある。十年前の校書郎のときの四倍以上もの収入増になる。仮に、今の三十二歳の国家公務員のキャリア組の月給が四十万（賞与込み）だとすると、十年後に二百万近くになったのであるから、左遷の憤懣も少しは和らいだのではないか。校書郎の約四倍の給料に、歳廩数百石が入るのであるから、如何に地方官の実入りが良いかが想像できる。晩唐の杜牧が弟の病気治療費を稼ぐために地方官を志願したことを想起させる。

また、「東林寺経蔵西廊記」（一四七七）には、「景雲律師塔碑」を撰した謝礼金で、経蔵の西廊下を作ったことが記されているが、かなりの高額の礼金であっただろう。「長恨歌」の白学士様としての名声により、こうした副収入も多かったのではないか。長安で売れっ子であった詩人には、揮毫や頼まれて作った詩や文にも多額の謝礼が入ったようである。「盧侍御小妓乞詩。座上留贈（盧侍御（じぎょ）が小妓　詩を乞ふ。座上に留め贈る）」（〇九〇七）等からもそのことが窺われる。今でも大学教授が給与以外に副収入として原稿料や講演料を稼ぐのに似ていようか。加えて、司馬の特権で土地代も人件費も極めて安価なものであっただろう。

「祭二廬山一文」（一四五二）には、「而遺愛西偏、鄭氏旧隠。三寺長老、招予此居。創新堂宇、疏旧泉沼、或来或往、棲遅其間。（而も遺愛の西偏に、鄭氏の旧隠あり。三寺の長老、予を此の居に招く。新たに堂宇を創り、旧き泉沼を疏（とお）し、或いは来たり或いは往き、其の間に棲遅す。）」とあることから、鄭氏の旧居の跡に草堂を建てている。元の泉や沼を用いたとあるから、その分手軽に作れたし、また、鄭氏旧隠とあるだけに格好の隠居場所であった。

三、その後の草堂

草堂建設前後の白楽天の行動をまとめる。

元和十（八〇九）年十月　江州到着

十一年秋　草堂建設決意

十二年春　完成　冬は行きにくいので、春を待っての完成これも計画的

十三年十二月　忠州刺史へ赴任

あれほど愛し、満足した草堂であったが、あしかけ二年、二十二箇月足らずの草堂生活であった。満ちたりた半隠の生活とは言え、やはり、白楽天にとってはそれよりも官途が大切であった。今まで、草堂での十分に満足した生活を述べてきたが、そこで述べられたことが果たして白楽天の本心かというと、疑問も湧いてくる。草堂での満ち足りた生活を率直に表明している面もあるが、強いて自分に言い聞かせて左遷の憤懣を晴らそうとしているのではないかとふと感じたりもする。「なるようになる」という思い、このままここで朽ち果てるのも運命、この環境ならそれも良しと自分に言い聞かす。その一方で、皇帝の下、国事に奔走したい、という従来の気持ちも湧いてくるし、高位高官への未練も断ち難かったのではないか。忠州刺史を拝命すると、心は草堂生活から離れたように思われる。

しかし、その後、白楽天は草堂を繰り返し詩に詠む。

「郡斎仮日、憶二廬山草堂一（以下略）」（一一一一　八一九年、四十八歳、忠州）の詩では、草堂を離れた直後に回想している。この他、「銭侍郎使君以題廬山草堂詩見寄。因酬之（銭侍郎使君の廬山の草堂に題する詩を以て寄せらる。因つて之に酬ゆ。）」（一二五〇　八二一年、五十歳、長安）の詩があるが、当時、草堂は有名になっていたことを窺わせる。

草堂と別れてから五年後、白は杭州刺史として赴く途中に立ち寄り、「題別遺愛草堂、兼呈李十使君（遺愛の草堂に題別し、兼ねて李十使君に呈す）」（一三二二　八二二年、五一歳、江州）の詩を残しているが、残念ながら一泊しただけであった。その前後は空き家になって

いたようである。それは、次の詩からも想像される。

「憶廬山旧隠及洛下新居」（二五四一　八二七年、五六歳、長安）の詩では、都長安で洛陽の新居とともにかっての安住の地、廬山草堂を想起している。洛陽に退去したときの心情と草堂の建設時の心情の類似を示していよう。また、洛陽履道里の粋をこらした邸宅の原型が已に廬山草堂にあったことが窺われる。

形骸僶俛班行内　形骸は　班行の内に僶俛し
骨肉勾留俸禄中　骨肉は　俸禄の中に勾留せらる
無奈攀縁随手長　奈ともする無し　攀縁の手に随ひて長ぜしを
亦知恩愛到頭空　亦た知る　恩愛の到頭空なるを
草堂久閉廬山下　草堂久しく閉づ　廬山の下
竹院新抛洛水東　竹院新たに抛つ　洛水の東
自是未能帰去得　自ら是れ　未だ能く帰り去るを得ず
世間誰要白頭翁　世間誰か要せん　白頭の翁

最後に草堂が詠まれた詩を挙げる。

寄題廬山旧草堂、兼呈二林寺道侶　廬山旧草堂に寄題し、兼ねて二林寺の道侶に呈す。（三四七二　八四〇年、六九歳、洛陽）

三十年前草堂主　三十年前　草堂の主
而今雖在鬢如絲　而今在ると雖も　鬢は糸の如し
登山尋水応無力　山に登り水を尋ぬるに　応に力無かるべく
不似江州司馬時　江州司馬の時に似ず
漸伏酒魔休放酔　漸く酒魔を伏し　放酔を休むも

猶残口業未抛詩　猶ほ口業を残して　未だ詩を抛てず
君行過到鑪峯下　君行きて　鑪峯の下に過ぎ到らば
為報東林長老知　為に東林の長老に報じて知らしめよ

『白香山詩集』（後集巻十六）には

此詩馮銭知進侍御、往題草堂中也。（此の詩銭知進侍御に馮（たの）みて、往きて草堂の中に題せしむるなり。）

の注がある。この時は、たまたま何かの事情で銭侍御が江州に赴く用事があり、それに託したものと考えられるが、二十年以上経ってからも、ことづけをして草堂に「寄題」している。愛したものへ繰返し追慕の情を述べるのは白詩の特徴の一つであろう。この詩は、六十八歳で中風に罹った直後の作で、江州の時に比べ体力は衰え、身は老いて、酒も節制しているが、詩作だけは、今もって健在と謳う。

白がこよなく愛した草堂での生活は終生忘れ難かったようで、このように繰返し草堂への思慕を詠んでいる。

付記　廬山・白楽天草堂・東西林寺訪問記

二〇〇八年八月、廬山の花径公園、白居易紀念館を訪れたが、元の花径公園は近くの人造湖の底と聞く。ただし、当時の遺跡は移築されて当時を偲ぶことはできると云う。近くに白楽天の草堂が再建されていたが、場所は全く異なる。再現された草堂前には、白楽天の像が有り、草堂の前にはとってつけたような池があり、白蓮が咲き、水面には数センチほどの白い小魚が泳いでいた。「環池多山竹・野卉」「池中生白蓮・白魚」（「草」）を模したものであろう。

実際の草堂は東林寺からさらに数キロ上方にあるという。東西林寺は、郊外にあって訪問客もほとんどない。ここに記念館を建てても無駄であろう。地元のガイドの話では、北香炉峰近くの草堂跡は、今は雑草をかき分けて行くので見た目以上の時間がかかるとのこと。ガイドの話によると、石垣が今も残り、唐代の陶磁器の破片もあるとのこと。なお、渡部英喜氏『漢詩の故里』（新潮選書）に、草堂跡を訪れた体験記がある。

東林寺付近の慧遠、陶淵明の「虎渓三笑」で有名な元の橋は洪水で流されたそうである。現在のものは場所を代えて架けられているが、「虎渓三笑」の山水画などにみる立派な橋や山水と違い、小さな粗末な橋であり、周りには山水画で見るような切立った岩や深い谷は無かった。絵師の誇大な想像の筆に我々も知らずに感化をされていた。さらに、元の橋が有ったという所は、洪水で水脈が変わり、涸れていた。

＊本稿は二〇〇八年八月五日の早稲田大学日本宗教文化研究所主催「慧遠と白居易」廬山セミナー（廬山国賓館）に於いて、「廬山と白居易」の題目で発表したものに大幅に書き足したものである。席上、種々の助言を戴いた方々に御礼を申し上げる。

＊＊『白氏文集』は、「那波本」を使用した。詩番号、制作年等は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店）によった。